

千住工場の建設（二）

この建設に当たった石川利丸（当時営業部員）は、次の様に回顧している。

「当時、わが日本を取り巻く世界情勢は誠に風雲急を告げ、満州事変、上海事変と戦局は日ごとに拡大し、ために当社の陸海軍に納入するガasketも急速に需要が増大し、作業員二〇名程度の町工場であった芝工場ではとても間に合わず、昭和一四年の千住工場建設へと発展してきた。当時、この敷地は全部畑で、千住名物であった“お化け煙突”の石炭殻で埋め立てた。」

昭和十五年四月操業開始、ようやく国産自動車として生産され始めた日産、トヨタ、いすゞ、その他外車のシボレー、フォードのトラック用ガasketを主生産品として、千住工場発展の基礎が確立されたわけである。

創業時の従業員構成は、男子三名、女子三十五名ほどという男子払底の女讓ヶ島で“美人工場”として評判であった。

このように千住工場は、着工して九ヶ月後の昭和十五年四月から操業を開始した。工場長は茂木寿一郎であった。

